



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	サンスクリット叙事詩『マハーバーラタ』第13巻の文学研究 [全文の要約]
Author(s)	中村, 史
Description	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。 https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第11621号
Issue Date	2015-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/58778
Type	doctoral thesis
File Information	Fumi_Nakamura_summary.pdf



サンスクリット叙事詩『マハーバーラタ』 第 13 巻の文学研究

【要 約】

中村 史

『マハーバーラタ』(Mahābhārata) は、古代インド成立の、古典サンスクリットによって記された叙事詩である。自ら 10 万詩節から成るとも言う巨大な存在である。ヒンドゥー教の聖典としての性格を持つにとどまらず、現在に至るまで愛好される文学作品である。従兄弟同志に当たるバラタ族のパーンダヴァ家とカウラヴァ家の兄弟が領土を巡って大戦争に至り、壮絶な結果に終わるという、史実に基づくとされる核部分を中心に、長大な物語となっていくものである。構造の点から言えば、世界的に見られる〈杵物語〉の一つであり、ときとして、杵となっている主筋のストーリーの進行を忘れさせるほど多くの、登場人物達が語る神話・説話(〈杵内物語〉)や思想・宗教・教訓的言説も展開してゆく。1 人の創作者に帰せられる作品ではなく、時代を越えて吟誦詩人達により語り継がれたのち記録された、本来ほぼ無限の成長の可能性を有し、口承文芸、語り物としての性格を継承している文学作品である。

本博士論文は、『マハーバーラタ』の第 13 巻を対象とした文学研究である。『マハーバーラタ』を研究対象とする主たる分野は、「インド学」あるいは(日本ではしばしば)「インド哲学」と呼ばれる。そこでは文献学的、基礎的研究が中心に行なわれる。『マハーバーラタ』が叙事詩研究や神話研究において取り上げられるときには非常に大局的に、あるいは何らかの理論に則して言及される。そのように『マハーバーラタ』を研究する最大・主要な研究分野は「インド学」「インド哲学」であるが、そこにおいては、思想・哲学・宗教あるいは言語の研究が主流である。歴史研究の希薄なことはよく言われているが、文学研究についても、思想・哲学・宗教研究ほど盛んに行なわれてはいない。基礎的研究、古典文学理論の研究、カーヴィヤ文学修辞学の研究等はあるものの、『マハーバーラタ』のような作品の文学研究は独自に確立しているとは言えない。それでは、文学研究一般に、基礎的作業以外の、作品解釈のための確定した、多くの研究者が従う手法や理論があるのか、という問いに対して、「存在する」と解答することもおそらくできない。文学(特に古典文学)の場合には独自にして、かつ確立した理論や手法というものはほぼない。他分野から理論や手法を導入し、それに基づいて文学研究が行なわれる場合もあるが、多くの研究者の支持を得て長く続くということがありにくい。したがって、文学研究においては、1 人 1 人の研究者が過去の研究成果に学びつつ、仮のものであっても自ら体系を作り、まとめあげるという努力を続けるしかないようである。文学研究は個々の研究者の個性やセンスに任される、あるいは左右される最後のもの(の少なくとも 1 つ)のようである。インド学において文学研究が発達していないその原因の 1 つとしては、研究そのものが共有され、個々の研究成果が継承される傾向が強いインド学 — その意味において社会科学系分野、場合によっては自然科学分野にも近い観がある — において、上述したような文学研究はなじみにくいという事情もあったのではないだろうか。

さて、本博士論文の第 1 章はいわば「総論」である。そこにおいて第 13 巻「布施の法」全体の構想と説話、構成と概要を見渡した。ここにおいては《C 杵物語》、《c 記録と編纂》、《y 教説性あるいは主題性》のレベルの考察

が主となった。

続く第2章から第6章までは「各論」である。上述の方法・視点によって、具体的に第13巻中の5つの特徴的な神話・説話、「蛇に噛まれて死んだ子供をめぐる対話」「鸚鵡とインドラの対話」「チャヴァナ仙と魚たち」「七仙人の名乗り」「ガウタマ仙とインドラの対話」を取り上げ、それぞれについて考察と和訳を行なった。

第2章から第6章において研究対象とする神話・説話は、前述の《A 口承文芸》、《B 語り物》、《C 杵物語》、《a 原伝承》、《b 語りの場と語り手（吟誦詩人）》、《c 記録と編纂》、《x 文学性》、《y 教説性あるいは主題性》、《z 祝賀性》のうちいずれのレベルで特徴を持つかという点において、それぞれに異なっていた。そのため各章は少しずつ異なった様相を見せていた。

第2章で取り上げた「蛇に噛まれて死んだ子供をめぐる対話」ではまず、ここではこの神話の《C 杵物語》の構造と《y 教説性あるいは主題性》の兼ね合いの問題が中心となった。すなわち、『マハーバーラタ』全巻に通底する主題としての「運命（kāla）と行為（karman）」がそこにおいてどのように表現されているかを見た。〈杵物語〉においては「運命」が、〈杵内物語〉においては「行為」が本来の主題であるところ、摺り合せによって両者がゆるやかに共存していた。また、ここでは、この神話に残っている《a 原伝承》としての《A 口承文芸》の性格が問題となった。「蛇に噛まれて死んだ子供をめぐる対話」の神話が孤立したものではなく、一定程度流布していた口承文芸のタイプ（型）が取り込まれたものであることも確認した。

第3章で取り上げた「鸚鵡とインドラの対話」は、《a 原伝承》としての《A 口承文芸》の性格を残し、《B 語り物》となつてはバラモン向けのメッセージ（「バラモンは優しい性向を持つ」）と、クシャトリア向けのメッセージ（「王と臣下に慈悲と敬愛の関係があるべき」）、さらにはもっと素朴な人々向けのメッセージ（「生き物達の友情物語・・・」）といった幾通りもの姿を見せ、《b 語りの場と語り手（吟誦詩人）》について考えるべきことが多かった。神話の知識と掛詞の理解が必要な偈もあったことも加えておきたい。また、第12「寂静の巻」中「王の務め」との関係という、《c 記録と編纂》の段階の問題も垣間見せる多面的な性格を持つ例となっていた。

第4章で取り上げた「チャヴァナ仙と魚たち」は、《a 原伝承》としての《A 口承文芸》の性格をよく残している例である。ヴェーダ文献以来のチャヴァナ仙回春神話を中心とするチャヴァナ仙神話群の伝統を受け継いでいることが確かめられた。そして、「ともに住む者への愛情」という道徳を基盤とし「棒杭苦行」モチーフを主軸として、新たな「チャヴァナ仙神話」として自在な展開を遂げるに至った様を知らしめていた。

第5章で取り上げた「七仙人の名乗り」は、《B 語り物》の性格が突出しており、《B 語り物》を《a 原伝承》とするものではないかと考えられた。七仙人たちの名前や行状は素朴な一般の人々によっても知られ、《A 口承文芸》レベルでも多く語られていたであろう。しかし、ここで取り上げた「七仙人の名乗り」の中で七仙人の言挙げを形作っている詩句は、いずれも専門的な優れた語り手、天才的な言葉の使い手によるものと推測した。そこで何はともあれ、七仙人達の名乗りが「言語遊戯」としてどのように読めるか、考察を行なった。鬼女に殺されず嘘をつかないようにしながらの七仙人達の曲芸的な名乗りに、同音異義語（掛詞）、疑似語源解釈、類似音連発等が見出された。後世のカーヴィヤ文学のアヌプラーサ、ヤマカ、シュレーシャ等とほぼ同様の文学技巧が『マハーバーラタ』の段階で自然に用いられているのである。また、自由奔放に展開する「七仙人の名乗り」を含むこの神話が、《C 杵物語》に嵌め込まれたときに生じた、〈杵物語〉と〈杵内物語〉の不整合についても言及した。そして、この神話の日本語訳を提示する際に、プーナ批判版では「七仙人の名乗り」が十分に解釈することができないことをも述べた。この神話は『マハーバーラタ』第13巻中で、《x 文学性》という点では最も達成度の高い話の1つである。

最終の第6章で取り上げた「ガウタマ仙とインドラの対話」もまた、《B 語り物》としての性格をよく示している例であった。そして、『マハーバーラタ』の《z 祝賀性》という点から考えさせられる例であった。「ガウタマ仙とインドラの対話」は2つの異なる語りを組み合わせていると考えられる。1つは、「良いことをした者の良い行き先」を唱え続けて、その「唱え言」によってブラフマンの世界に赴く、と言祝ぐものであった。いま1つは、仙人の象を盗もうとする王が仙人を試そうとするインドラ神の化身であった、というものであった。これらの語りはもともと《A 口承文芸》のレベルのものであったと考えられる。直前に語られた「バラモンの持ち物を盗んだ者達の末路」という恐ろしくも罪深い話の厄を払い福を呼ぶものとしても語られていた。『マハーバーラタ』を聴聞することの功德は『マハーバーラタ』中で力強く唱導されているものであった。別の見方をすれば、『マハーバーラタ』の神話・説話が、広く世界に伝播している口承文芸（特に昔話）のさまざまな話型を含み込んでいることを比較研究により実証する可

能性は大いにある。そうした世界的な口承文芸の諸要素を共有しているとすれば、それは『マハーバーラタ』の「普遍性」である。ただし、口承文芸研究はヨーロッパにおいて先行し、ヨーロッパを基準としてなされてきたものである。したがって、『マハーバーラタ』を初めとしてインドの古典文学の神話・説話はしばしば相当に異なる様相を見せる。古典インドの神話・説話、口承文芸独自の把握（分類等）があることが望ましいのであるが、この2点は本博士論文ではごくわずかに具体的な言及をしたのみである。「蛇に噛まれて死んだ子供をめぐる対話」「鸚鵡とインドラの対話」「チャヴァナ仙と魚たち」「七仙人の名乗り」「ガウタマ仙とインドラの対話」、いずれの例も古典インド口承文芸の特徴を示すものである可能性がある。そういった視点・方法のあり得ることを意識しつつ、将来の研究課題として見据えておくこととする。

これに対して、『マハーバーラタ』の神話が、ヴェーダ文献等の先行するインド神話・説話の伝統をも継承しつつ、特有あるいは特徴的な性格を持っているとすれば、それは『マハーバーラタ』が「普遍性」とともに合わせ持っている「独自性」である。本博士論文では、将来の研究のためのささやかな端緒として、

α 普遍性

β 独自性

の2点からも、『マハーバーラタ』第13巻を研究した。基盤となる思想・信仰の《 α 普遍性》、《 β 独自性》が究明されるに伴って、具体的な表出・表現の《 α 普遍性》、《 β 独自性》を考察することが可能になる。背景・基盤となっている思想・信仰を共通のものとしつつ、具体的な表出・表現のあり方は異なる、という現象が多くあることが予測される。比較研究の趨勢としては《 α 普遍性》、すなわち、世界的・国際的な共通性が強調される向きがあるが、《 β 独自性》、その文化における特徴、特有の性格を見出すことを怠るべきではない。

さらには、付随的に、『マハーバーラタ』の最優勢刊本である批判版の問題が一部明らかになった。たとえば、「七仙人の名乗り」を批判版を底本として和訳を試みたとき、思想的背景を考慮しつつ七仙人の名乗りの技巧を解釈することが十分にはできなかった。また「ガウタマ仙とインドラの対話」の「祝賀性」を考えたとき、批判版によって『マハーバーラタ』聴聞・詠唱の功德の意味が大きく削ぎ取られており、『マハーバーラタ』の持つ、罪を滅するという役割が薄弱になっていた。

批判版の原型構築の志向は評価すべきである。とはいえ、文学作品の展開した姿を否定することも不当である。そもそも、『マハーバーラタ』批判版のように、何らの底本もなく、文字通り1字1句、写本群から取捨選択して組み合わせ、新たな偈を創出してゆくという方法に問題はないのだろうか。そういった、いわば人工的テキストを作成する手法は断片のみ残る文献等にやむをえず行うのが適切であろう。『マハーバーラタ』ほどに流布し、膨大な数の写本を持つ文献の場合には、その中からより良い写本を選び、最小限の修正を加えつつテキストを作成するのが正しい学問的態度である。

『マハーバーラタ』に限ることなく、さまざまな分野の研究者が古い文学作品を取り上げる。歴史を研究する人々がそれら文学作品を研究対象として用いるとき、主としてそこに歴史的事実の痕跡を見出そうとする。また、思想・哲学を研究する人々が文学作品を研究対象として用いるとき、多くそこに思想・哲学の反映を見出そうとする。本博士論文は、『マハーバーラタ』の第13巻を対象とした文学研究である。換言すれば、思想性の強い、あるいは哲学的な文学作品がどのように作り上げられているのか、なぜそのような作り上げられているのかを、思想・哲学の研究成果に学びつつ、思想・哲学ではなく文学作品を主体として追求した研究成果である。